

プリオン病の二次感染リスクと その対策に関する研究

研究分担者：埼玉医科大学医学部 高柳俊作

手術器具等を介したプリオン病の二次感染リスクに関してCJDインシデント委員会
の下で活動。欧米を中心とした国々の感染予防ガイドラインなども調査

インシデント事例フォロー状況

事例数	CJD診断期間
23	平成16年6月～令和6年1月

各国の感染予防対策

国名	感染予防ガイドライン相当文書
アメリカ	あり(『Infection Control for CJD』)
カナダ	あり(『Classic Creutzfeldt–Jakob disease のための Infection Control Guidelines』)
イギリス	あり (『GP 04 CJD Community IPC Policy 2021』)
オーストラリア	あり
WHO	あり(WHO Infection control guideline)

解 説

1. 令和7年度は新規インシデント事案が1例あり訪問調査を、インシデント委員会の下で行った。これまでに23事例がフォローアップの対象となっており、二次感染の発生はない。
2. 海外の感染予防ガイドラインに相当する文書の有無とその記載状況を確認した。いずれの文書にも共通しているのは、二次感染の高リスク手技を行う可能性がある場合は、あらかじめ“プリオン病の可能性(既往歴や症状)”を考慮し、ディスポ器具の使用や厳格な手術器具再処理(洗浄＋滅菌)の施行、あるいは焼却を検討する事をすすめている点である。